茶屋町の薬師堂

奈良街道を寺田小学校から少し北にいくと、小さなお堂があります。昔は街道を歩いていてよく目につきましたが、最近は気づかずに通りすぎる程、人家に囲まれてしまいました。茶屋町と言うのは、このあたり約二十軒の町内ですが、お堂はその会所になっていて、人々は「お薬師さん」と言っていますが、その言葉には非常に親しみの響きが感じられます。

この薬師堂の土地は、地券（明治政府の出した土地の権利証）によりますと、寺田・念仏寺の寺地で、寺田字正道二十三番地・百五十二坪となっています。

江戸時代には薬師堂ではなく、薬師寺として住職がおり、念仏寺の末寺でした。享保十七（一七三二）年六月、初代薬師寺住職の亡くなった記録が念仏寺に残っています。お堂のまわりは竹藪で、その中に住職のお墓などもありました。

しかしお堂はもっと古くから建っていたと考えるべきで、街道ぞいの薬師堂にお坊さんが住みついて念仏寺の末寺になったと見るべきでしょう。

このお堂には毘沙門天、不動明王、地蔵尊の各立像と、扉の閉じられたままの厨子が三つと外陣にあたる壁に三十三カ所の軸がかかっています。三つの厨子には、阿弥陀如来、薬師如来、円光大師の尊像が入っているのですが、どの厨子にどの仏像が入っているのか誰も知りません。と言うのは、昔、茶屋町の人が参詣したついでに厨子をあけて仏様を見た所、急に病気になったと言う言い伝えで、それから誰もこの厨子をあけた人がいないからです。

薬師堂のおもりをする家をお宿と言って、一年間鍵をあずかります。順番にまわってきますから、二十年に一度の割になります。お宿とは別に町内には尼講があって、現在は五人の人が毎月八日・十二日・二十三日の三日間、午前七時半からお経と御詠歌をあげます。このとき仏壇に花をあげ、お茶を準備するのがお宿の仕事です。春秋の彼岸には、一週間続けて勤行が行われます。

夏の地蔵盆もこのお堂で行われ、戦前の子供は、お宿でこしらえて出す夜食が非常な楽しみであったと言います。尼講の御詠歌で地蔵盆がおわりますが、この様に薬師堂は、茶屋町の人達の生活にしっかり結びついているのです。